



TITLE:

<批評・紹介>日鮮神話傳説の研究 三品彰英著

AUTHOR(S):

岡崎, 精郎

CITATION:

岡崎, 精郎. <批評・紹介>日鮮神話傳説の研究 三品彰英著. 東洋史研究
1944, 8(5-6): 340-343

ISSUE DATE:

1944-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145804>

RIGHT:

まり、一貫せる歸納的考察の加へられざるが爲めに、ともすると一部史家の考古學的體系を無視せる恣意自用なる摘出引用を來し易からしむる一方、初心者にとりてはそれら斷片的資料の中に體系を把握せんとするは極めて困難であり、それへの努力は屢々當を失せるものとなり終せる可能性強く、更に又一般人には興味索然たる存在としてのみ止まり、一般的關心と有志者の廣汎なる協力を特に必要とする考古學にとつて、却つて對社會的に自ら溝を深むるの逆効果を齎しつつあるやに感得せらるゝものすらあるに對し、獨り本書は『各説』に於ける個別資料の檢討に加ふるに、それらを總括一貫せる歸納的論攷たる『總説』を以てして、從來の資料集に隨伴せる如上の缺陷を補正して餘す所なく、本書の構成又、『序説』より以下些かの理論的飛躍、體系的間隙を窺はしむるものなく首尾一貫、堂々の展開を示して資料集にして只單なる資料集に止らず、過去二十餘年に亙る支那古鏡鑑沿革考の樹立に對する本邦學者の努力は、今や本書の示す基準に照らしていよいよ完成の域に達したものと云ふべく、所謂鏡鑑學の體系樹立に對して本書は殆ど決定的な意義を有するものと言ふべきであらう。ともあれ體系と云ひ理論と云ふも一朝一夕にして成るものではなく、本書を通じて窺ひ得られる如く、編著者が既往の諸學說の粹果の批判的攝取と、更に何よりも關係資料の全般に亙り、その個々に即せる實證的努力の營々三十餘年の辛苦の結晶としてのみ初めて本書が世に問はれ、今かうして机上にある事を惟ふ時、編著者の實證

性に徹せる高邁なる學者的良心に對し、自ら頭の垂れ頰傳ふものあるを覺えるのである。個々に即するの實證的努力の後に、個々の中より抽象歸納せられてこそ、初めて體系であり、理論であり、歴史であり得るのであつて、そのみが普遍性を持ち得るものであるにも係らず、ともすると若干の斷片的な知識を、只單なる「思ひ付き」の似非理論の糸につなぎ止めて、表題のみ徒らに仰々しき羊頭肉肉的論文をものして得々たる自稱大家連の剩へ出版インフレの浪に乗つて、それを世に問ふブツクメーカ的傾向の今や滔々として世を蔽ふやの觀ある時——勿論、それらは、「時」が絶對的な批判者として、やがてうたかたの如く消え失すべき存在に過ぎぬとは謂へ——、些かでも後進を毒し學問を冒瀆せる點に對し、本書の刊行は、それ自體無言の批判と抗議とを代辯するものであり、體系的表現への魅惑の餘りベダンテイツクなポーズを身につけんと焦慮しつつあるかに見える一部新進學徒への良き反省の手だてともなるであらう。「時」がやがて本書に「古典」としての自らの位置を與へるであらう事を、私は此處に斷言してはゞからぬものである。幸に編著者の一層の健康と「叢刊」の續刊とを祈つて、此の貧しき紹介の筆を擱く。(眞島行雄)

日鮮神話傳説の研究 三品彰英著

昭和十八年六月 柳原書店刊
A 5 版三〇〇頁 定價參圓九拾錢

高木敏雄氏の「日本神話傳説の研究」が公刊されたのは大正十四年であつたが、我々は今や三品先生の「日鮮神話傳説の研究」をもつこととなつた。日本の神話傳説より朝鮮のそれへと探求の歩を進められた今西龍博士の業績を繼承し發展せしめられたのは實に三品先生なのである。一體、過去の史實を其儘傳へるといふ點では、神話傳説は無論正確な歴史たり得ない。併し神話傳説はそれを傳承する民族の理念や社會の實生活を反映し、その原初にあつてはそれを傳承する人々の生活規範たりしが故に、それは重要な古代史料である。しかも日鮮文化が古代的には甚だ近親の關係にあつたことは兩者の神話傳説の比較研究を強く要請する。その後期的外衣を除き、その奥に早期的基本的要素を求め、本質的類同性・基本的要素の共通を探索することによつて、兩者の民族的文化的親縁が指摘されるべきである。この立場は本書所收の諸篇を通じて見出されるのであるが以下順に觀てゆきたい。劈頭の「東洋神話學より觀たる日本神話」は日本神話の關係をもつ諸方面を放へられ、特に日鮮神話について、先の立場を提示されたが、日支兩民族について神話する心の有無を論ぜられたのは特に注意したい。記紀神話異傳研究の一齣」では「異傳は自らに夫々の歴史を負うてゐる。異傳のもつ歴史は時と處に聯關する軸によつて立體的に組合された構成に於いて理解」さるべく、なほ具體的には「異傳の特性を通じてそれが結び付いてゐた社會と時代とを先づ以て考察」すべしとされる。始祖神話はそれを傳承する社會の生活と緊密

に結び付き、廣く社會組織の根柢にあるが故に、かゝる神話ではその社會の存續する限りその基本的要素は永く傳承されるのが原則であり、他の要素が加へられても、基本的な部分は永く保存される。従つて、諸異傳に共通のものが基本的乃至比較的古い要素である。この前提に基いて天孫降臨神話の要素を分析された結果、普遍的要素に對しては神話の淵源的考察を、特殊的要素に對しては神話の後期的歴史的考察の意圖され、數段に亙る考察により早期的基本的所傳として書紀本文及び同第六ノ一書を、後期的發展的所傳として書紀第一ノ一書・古事記を指摘された。そして後期的發展的な姿に我神話の力、更に國史の發展力を認められたのである。「脱解傳説——東海龍神の信仰——」では脱解傳説の二次的變容の裏面にその本質を見出されんとしたもので、脱解は元來海上より來臨する神靈であり、且吐含山の神であつたことを究められた後、脱解の名義の解釋に入られる。更に龍神の子といふ點に關して脱解傳説に近似する處容郎の出現傳説を引出され、神靈と歌舞が密接に關係する點について萬波息笛の傳説を挙げられ、之らは何れも東海龍王に關する俗信から產出されたものとされた。更に、脱解の父、含達婆の傳説成立を放へられて、それは同有の海神信仰の變容なりとされ、東沃沮の海中女國の傳承と本傳説を關聯づけられて本傳説の古さを推され、本傳説の中で重要な役割を演ずる鵲を取上げられることによつて、海の女と天系の神との神婚といふ降臨形式を本傳説の中に想定せられてゐる。「首露傳説——祭儀と

神話——では、首露王降臨神話(賓洛國記)——と首露廟の祭儀を夫々「語られ觀想せられる部分」「行爲せられる部分」と名付けられたが、龜茲峯に降臨する神童と奉迎する人達——首露王の神婚——首露神話の佛教的潤色——古代韓族の祭政的王者——我が天孫降臨神話との比較の、順に考察を進められた結果、首露傳説が首露廟の祭儀的實修に昭應し、且韓族の古代祭政の精神に通ずるものであり、神話として我天孫降臨のそれに似通ふことを指摘された。「對馬の天童傳説」は「對馬須佐村見聞記」と相補ふ。天童傳説では先づ天童地の考察より始められる。神聖な樹木に來臨する神的存在が即ち天童なることを突止められた後、天童の傳説を分析されて新羅始祖傳説・八幡傳説に類似點を求められた。次いで天童に配された觀音——觀音堂と天童地の關係を説かれて御子神・母神の問題を提起される。そして女神が御子神を出産する傳説が結合するに恰好なものとして神功皇后と安徳天皇の問題がある。更に天童地のタテラといふ地名に就いて天童信仰と冶金の關係を攷へられ、この關係を明らかにするものとして宇佐型の八幡傳説が持ち出される。天童信仰の一別態たる阿連の雷神社を指摘された後、阿曇連等が奉祀する海神少童命を擧げ、之に奉仕するアヅミの原義、アヅミと鍛冶關係を考へられ、「日本でも朝鮮でも、太平洋諸島土民と同じ様に、海の彼方に靈の國を考へてゐるところから云つても、海女や海尺之母が祖靈傳説やその祭祀儀禮の上に現はれ來るは寧ろ當然である」所から、サルメノ君——その代表的一人として穆阿禮

がある——の行ふ鎮魂の作法の起りを説く傳説の内に見受けられる海神との關係に論及せられた。對馬須佐村見聞記は天道祭・觀音緣起・當の行事の諸項より成る。「天之日矛歸化年代攷」は「一所傳内容の史實的年代の考察ではなく、各異傳の立場と理由との論究」であり、かゝる所傳以前の素材の形に於いて觀るべく試みられたものである。先づ、書紀の都怒我阿羅斯等の話から始められる都怒我阿羅斯等なる任那王子の名から「有角人」といふ逸話の發生する過程が攷へられる。そして都怒我阿羅斯等の名を角干阿羅斯等と書き改めて韓語としての感じを出すべく試みられた後角干が倭訓を以て讀まれたが故に、異民族歸化人に對する一般的な好奇心及び名稱に對する説明的興味等が相經緯してかゝる異形説話が構成されたと説かれた。そして角干(Shukyan)の文字が新羅で使用された年次が大體新華の統一期以後なることよりして、都怒我阿羅斯等なる韓人名及びそれから誘導された有角人なる異形説話の史料年代と價值とを評斷すべしとされたのである。所で、この人名は餘程後代のものなるにも不拘、崇神・垂仁の御代まで持つてゆかれたのは何故であらうか。この疑問を解決すべく記紀の組立てを論究せられた。古事記の日韓關係記事の年次的配列には別に不自然さは認められぬが、書紀では三韓問題の發足點が二つ——一は神功皇后の三韓征伐であり、一は崇神垂仁の御代にある——になつてゐる。かくなつたのは、多様な史料を編輯した書紀に於いて、崇神垂仁の御代に三韓問題を結びつけねばならぬだけの素材と解

釋と企圖とがあつたからである。以上の考察を前提として、天之日矛の歸化傳説の記載を記紀の年代史觀に即して考へられた結果、年次に關する諸説の年系譜のみに重點を置く孝靈説よりも、自己の時代觀的背景を顧慮しつゝ他の諸事項と關聯せしめることによつて年次を求めた書紀により多くの史學的價值が認めらるべきであるが、更に、神功皇后の新羅征伐といふ古傳承に據所を求めた古事記の説にはより以上の價值あることを決定されたのである。「かぐや姫の本質に就いて―竹取物語素材の研究―」は「傳承文學から記載文學への過程を逆に辿り、その民間傳承としての原形態を素材の形に於いて把握し、民間傳承に相應はしい原初的意味を理解」せんとされたもの。波多江種一氏の研究は單に部分的な類型の探索に終始し、全説話の構想が省みられぬ缺陷があつたが、本篇はそれを補足する意味をもつ、先づ赫映姫の生ひ立ちが問題となるが「竹の中の姫」なる種差的特徴が最初の目安とされる。竹筒から美女が出現するといふこと、竹筒から生れることの意味を考へられる。そこで「なよ竹の赫映姫」と呼ばれた意味の考察の結果、赫映姫は光る子であり天の御子であることが、明らかにされる姫が光る竹・籠により人となつたことは天の光る子の降る過程を示すわけであるがこゝに光る天の御子の依代としての竹の意味が考へられてくる。竹取翁の名も想起されるが、この名からは議論を進め得ないため、物語の内容から翁の特性―竹から籠を作つた、天の光る子を籠に入れて養つた―を抽出し、之によつて考察を進めら

れる。籠と神の子との神話的土俗的關係依代としての籠の土俗、天の御子降臨の神話が考へられた結果、竹取翁の名も籠を作つてゐたといふことも、その原初的な意味は天つ神の依代としての籠を造つたのではないか、竹取翁は從つて聖業者ではない、かと想定される。生立ちの考察に續いて昇天の形式にも觸れられてゐる。補遺の中に採集された、南方諸民族の説話傳説は竹の中より始祖の生誕する要素を含み、日鮮傳説との比較研究を促す。我上代文化に於ける南洋要素の問題は夙に松本信廣教授の採上げられた所であり（日本上代文化と南洋）、三品先生は近稿「滿鮮諸族の始祖神話に就いて」に於いても卵生型神話の分布が朝鮮からマライシャ方面に亙ることを説かれてゐる。南方要素の問題は決して閑却され得ないのである。

以上、先生の新著に對し、淺學の身をも顧みず妄言を弄した。それは私の理解し得た限りに於いてのものなのであり、幸にして誤解なからんことを祈るのみである。（岡崎精郎）

中華民國三十年史（岩波新書） 橘 横 著

このむやみに手際よく要領のよい書物を手際よく紹介し、要領よく批評するなどといふ藝當は、どう考へてみても、いまの僕がよく爲し得るところではありません。それでもどうかかと思つて、實はこの數日沈思熟考を重ねてみましたが、併し要するにこの書物は皆さんに第一頁から終りの第二百七頁まで、克